

感動詞「おら」の機能について

六 城 雅 章

一 はじめに

現代語の感動詞⁽¹⁾の一つに、粗暴なものではあるが、(1 a ~ e) のように、様々に使用される「おら」という語がある。

- (1) a (不良少女が、拾ったアクセサリを持ち主に手渡す際に) おら (『ヤ』五⁽²⁾)
- b (万引きの証拠映像を確認させる場面) おら この万引きしてるのお前だろ? (『い』五)
- c (雨を降らせるとけてなくなる雲に対して) おら、とけろ。そら、とけろ。(『…略…』(『雲』))
- d (戦いの場面で、屈んだ体勢をとった話し手が、立っている相手の足を掴もうとする際に) ホッ ホイ ヨッ オ
ラ ホ (『ホ』九)
- e (男子高校生が、横並びで歩いている他校の男女に対して) オラ てめえらなにイチャこいてんだ しばかれて
えのか? (『こ』三)

本稿は、文法論の観点から、かかる感動詞「おら」がいかなる機能をもつのかを明らかにしようとするものである。

なお、感動詞「おら」は、「おらおら」という語形で現われることも多くあるため、本稿では、「おら」「おらおら」の両語形を考察の対象とする。

二 辞典の記述

感動詞「おら」について、その意味・機能を主題的に論じた研究は、管見の限りないようである。加えて、『日本国語大辞典』（第二版）をはじめとする国語辞典にあっても、感動詞「おら」を立項していないものが多い⁽³⁾。『三省堂国語辞典』（第七版）・『大辞林』（第四版）・『デジタル大辞泉』は「おら」を立項している——ただし、これらが見出し語とするのは「おらおら」のみである——が、次に引用する⁽⁴⁾ように、その記述は、先の(La-se)の全例を的確に説明するものとはいえない。

・ おら おら〔感〕〔俗〕人に乱暴に〈呼びかける／命令する〉声。「―、そこをどけ！」〔三省堂国語辞典』（第七版）

・ おらおら㊦〔感〕乱暴に呼び掛けたり、威嚇するようなときに発する語。「―、そこをどけ！」〔大辞林』（第四版）

・ おら―おら㊧〔感〕乱暴に言いつけるときのなどに発する語。「おらおら、道をあける」㊨〔名・形動〕俗に、強引または強気な態度・性格を表す語。〔デジタル大辞泉』

また、一般的な国語辞典とは異なるが、『日本俗語大辞典』（初版）は、「おら」について、次のように記述している。

・ おら〔感〕相手に注意を促す時に発することは。荒い語感。男性が使用。◇『男はつらいよ』①（1991年）〈山田洋次〉「おら、どうした」◇『特攻の拓』⑪（1994年）〈所十三〉「オラあ！ もっと寄れよ！」◇

『梧桐勢十郎②』（1998年）（かずはじめ）「オラオラどうしたあ体力作りだ」

しかし、これも、先の（I a e）の全例を的確に説明するものとはいいがたい⁽⁵⁾。

以上のように、感動詞「おら」の機能については、一部の辞典に記述がみられるものの、その研究はほとんど進んでいないといつてよい。かかる状況に対して、本稿は、感動詞「おら」のもつ機能を明らかにしようとするものである。以下では、まず拙稿（二〇一六）および拙稿（二〇一七）により、呼掛詞⁽⁶⁾による呼掛（「おい」「そら」「ほら」「はい。」など）および掛声（「せーの。」「そら。」「ほら。」「起立。」など）の機能を確認し、つづいて感動詞「こら」「そら」「ほら」の機能を論じる。そのうえで、感動詞「おら」の機能について、「おら」と語形の近い感動詞「こら」「そら」「ほら」の分析を参考に、考察を行なう。

三 呼掛詞による呼掛

本節では、呼掛詞による呼掛の機能および分類を論じた拙稿（二〇一六）の内容のうち本稿に必要な部分を整理して示す。ただし、拙稿（二〇一八）において拙稿（二〇一六）の分析に微修正を加えた箇所があるため、当該箇所については拙稿（二〇一八）の分析による。

呼掛詞による呼掛は、「〈我〉—〈汝〉」の言語場を構成する⁽⁷⁾（以下、「言語場構成」とする）機能のみをもつ「典型的な呼掛詞」である「第一種呼掛詞」と、「言語場構成」機能のうえに「指示」「気付かせ・思い出させ」「促し」という機能が加わった「周辺のな呼掛詞」である「第二種呼掛詞」とにわけられる。第一種呼掛詞としては「あ」「おい」「おう」「すみません」「ちょっと」「なあ」「ねえ」「のう」「もし」「やあ」「やい」「よう」が挙げられ、第二種呼掛詞としては「いざ」「さあ」「そら」「それ」「はい」「へい」「ほら」「ほら」「ほれ」が挙げられる⁽⁸⁾。

感動詞「おら」の機能について

第二種呼掛詞が「言語場構成」機能のうえに加えもつ三つの機能について。第一に、「指示」とは、「キャッチボールをしておりボールを投げ返す際に相手に「そら」「それ。」といい、傍で泣いている人にハンカチ差し出す際に「ほら」「ほれ。」というような場合」すなわち相手に何か（もの）を手渡す場合に使用される「ソ」系の指示詞と関係する「呼掛詞に認められる機能である。ここでは、「自分Ⅱ（我）の領域を離れて相手Ⅱ（汝）の領域に渡るはずのものとして」その『もの』が存在する」という事態が「指示」されている。なお、相手に何かを手渡す際に使用される、「ソ」系指示詞との関係をもたない呼掛詞「はい」「へい」「ほい」の機能については、「指示」に準じるものとする。第二に、「気付かせ・思い出させ」とは、田窪・金水（一九九七）が「ほら、オリオンが見えるよ。」「ほら、同じクラスに、吉田ついでただろう。」「ほら、答が違うよ。よく考えてごらん。」という例を挙げて「話し手にとつてはすでに登録済みの情報を聞き手に気付かせたり思い出させたりする機能を持つ」と指摘したものである。第三に、「促し」とは、「それ、行け。」「ほら、早く問題を解きなさい。」「いざ、行こう。」「さあ、走れ。」のような例にみられる「相手Ⅱ（汝）に何らかの行為を促す」機能である。なお、「はい、早く問題を解きなさい。」のような、命令・勧誘の表現とともに用いられる「はい」の機能については、「促し」に準じるものとする。

右に述べた、呼掛詞による呼掛の機能を整理して示すと、次のようになる⁹⁾。

- ・ 第一種呼掛詞による呼掛 …… 言語場構成
 - ・ 第二種呼掛詞による呼掛 …… 言語場構成 + 指示／気付かせ・思い出させ／促し
- そして、「おら」と語形の近しい感動詞「そら」「ほら」は、第二種呼掛詞として使用される。

四 掛 声

拙稿(二〇一七)は、(2a~e)のような文¹⁰⁾を「掛声」と呼び、その機能・分類を論じたものである。本節では、拙稿(二〇一七)の内容のうち本稿に必要な部分を整理して示す。

(2) a (話し手自身と話し手自身以外の者との二人で荷物を持ちあげる際に) せーの。

b (合唱における、指揮者の発話) さんはい。

c (学校の教室における、日直の発話) 起立。

d (式典の進行の一環としての、司式者の発話) 起立。

e (話し手自身が立ちあがる際に) よいしょ。

拙稿(二〇一七)は、次のように述べて、掛声を、聞き手が必要な文であるとする。

掛声は、動作を行なう者に対して「声」を「掛」けることで、その動作のタイミングを調整する文である。したがって、掛声の発話においては、その動作の主体であり、声を掛ける対象となる者が、「聞き手」として必ず存在することになる。本稿では、それゆえに、話し手自身が動作の主体である場合には、その話し手自身が「聞き手」になっているものと考ええる。

そして、掛声の機能を「聞き手の動作のタイミングを調整する」とものと結論づけ、そのうえで「掛声の発話は、必ず、聞き手がある決められた動作を行なうことを了解し、それを前提としてなされるもの」であるとする。

掛声は、(2a~d)のように「話し手自身以外の者が聞き手に含まれるもの」である「A類」と、(2e)のように「話し手自身のみを聞き手とするもの(=話し手自身以外の者が聞き手に含まれないもの)」である「B類」とに大別され

る。さらに、「A類」は、(2 a・b)の「せーの。」「さんはい。」のように「聞き手の動作のタイミングの調整のみを行ない、その動作の内容の表示を行なわないもの」である「A I類」と、(2 c・d)の「起立。」のように「聞き手の動作のタイミングの調整とその動作の内容の表示との両方を行なうもの」である「A II類」とにわけられる——「B類」は、「話し手自身一人のみが行なう動作のタイミングを調整する際に、自身が了解している動作の内容を表示する必要がそもそもない」ため、(2 e)の「よいしょ。」のように「聞き手の動作のタイミングの調整のみを行ない、その動作の内容の表示を行なわないもの」となる——¹¹⁾。

なお、A I類に用いられる語類の代表例としては次に示すものが挙げられ、

あつぶつぶ／いちに／いちにさん／いちにのさん／いっせーのーせ／うん／うんさ／うんしょ／うんせ／うんと
 こさ／うんとこしょ／うんとこせ／えい／えいや／えっさ／えっさっさ／えっほ／おいちに／おう／オーエス／
 こらさ／こらしょ／こらせ／さあ／さんはい／ジャンケンポン／せーの／そら／それ／たあ／ちっちのち／てい
 ／とう／どっこいさ／どっこいしょ／どっこいせ／どっこらさ／どっこらしょ／どっこらせ／はあ／はい／はい
 チーズ／はっ／はっけよい／ひいふうみ／ひいふのみ／ふん／ほい／ほいさ／ほいしょ／ほいせ／ほっ／ほら／
 ほれ／やあ／やっ／やっこらさ／やっこらしょ／やっこらせ／よいさ／よいしょ／よいせ／よう／よっ／よっこ
 いさ／よっこいしょ／よっこいせ／よっこらさ／よっこらしょ／よっこらせ／わっしょい／わっせ／ワンツー／
 ワンツースリー

A II類に用いられる語類の代表例としては次に示すものが挙げられる。

集まれ／撃て／解散／開始／駆足／合掌／構え／乾杯／起立／気を付け／敬礼／後退／腰をおろせ／捧げ銃／集
 合／終了／出発／進め／整列／前進／着席／撤収／止まれ／直れ／担え銃／二列から四列／始め／発射／番号／

左／左向け左／開け／前へ倣え／待て／回れ右／右／右向け右／黙想／黙禱／休め／やめ／用意／よし／礼／別
れ

B類には、A I類に用いられる語類のうち、聞き手が一人である場合に使用可能なものの多くが用いられる。

このように、「おら」と語形の近しい感動詞「そら」「ほら」は、「聞き手の動作のタイミングを調整する」(以下、「タイミング調整」とする)機能をもつ文である掛声としても使用される。

五 行動制御

「おら」と語形の近しい感動詞の一つに、「コ」系指示詞との関係をもち、次のように使用される「こら」という語がある。

(3) a (三輪車に乗った五歳の息子が母親より先に交差点へ向かっていく際の、母親の発話) こら 先に行っちゃあぶな
いわよ (『ク』一)

b (不良高校生が、自分を更生させようとする教師に対して) テメーはオレの親かコラ!! (『カ』一〇)
また、感動詞「これ」は、「こら」と同じく「コ」系指示詞との関係をもち、次のように使用される。

(4) a (…略…) 弟は面倒臭そうに話をする、駈け出して来て縁側で独楽をまわし始めました。「これ! また
そんなところで。縁側で独楽をまわすんじゃないとくじかないか。」祖母は直ぐ後から歩みよって
叱りつけました。(『白』)

b (…略…) 老母は、もつてのほか怒って、顔の色まで変じ、「これ! 元直」と、身を正して叱った。
(『三』)

感動詞「おら」の機能について

かかる感動詞「こら」「これ」について、拙稿(二〇一六)は、次のように述べて、これらを「呼掛」と区別する。本稿もこの分析に従う。

指示詞との関連をもち、相手へのはたらきかけを表わす広義感動詞として、「こら」「これ」がある。名詞によるものであれ呼掛詞によるものであれ、呼掛にかかわる指示詞は、ファイラーとしても使用可能な「あの」を除いて、呼掛が「〈我〉—〈汝〉」の構造を有することから「ソ」系であるが、対して、「こら」「これ」が関連をもつのは「コ」系である。また、特に「こら」については「いばって人をとがめたり、怒って他人に注意する時に発する語」(『日本国語大辞典』)などと記述されるごとく、これは「呼掛」ではなく、威張り、咎め、怒り、注意することの表現であると考えられる。以上から、本稿では、「こら」「これ」を呼掛詞ではないものとする。

加えて、(3a・b)(4a・b)の「こら」「これ」には、「掛声」の機能である「タイミング調整」機能も認められない。

まず、(3a)の「こら」については、次に引用する『現代感動詞用法辞典』(初版)の「こら」(二)の項の記述が参考になる²²⁾。

相手を叱責する呼びかけを表す。ややマイナスイメージの語。感動詞として用いる。「こらっ」は後ろに声門閉鎖を伴う。音調はHMの2拍である。やや古風な表現で、現代では使われる場面に制限がある。特に、上位者が下位者に向かって注意を喚起して叱責し、相手の行動を制止する場合に用いることが多い。〔…略…〕

ここでは、「こら」の機能に関わる点として、(i)相手を叱責する、(ii)上位者が下位者に対して使用する、(iii)相手の行動を制止する、という性質の存することが述べられている。(i)について、「叱責」は普通、相手の行動(既に行なった行動、今現在行なっている行動、これから行なおうとする行動)が望ましくないものである場合になされ、相

手の行動を制御するものである。(iii)の「相手の行動を制止する」とは、かかる行動の制御について述べたものであると考えられる。また、行動制御や叱責は、上位者が下位者に対して行なう方が効果的であるため、一般には、上位者が下位者に対して行なうのが普通であり、これを述べたのが(ii)である。このように、「こら」は、上位者である話し手が下位者である聞き手に対して「行動制御」および「叱責」を行なう際に使用されるものであり、(3a)の「こら」はこれを行なっているものと考えられる。

次に、(3b)の、高校生から教師に対して発せられている「こら」については、相手の行動(自分を更生させようとする)をやめさせる「行動制御」の機能が認められるが、一方で、(3a)と同様に相手を「叱責」している、とはいいたいように思われる。当該の「こら」は、むしろ、「行動制御」のために、話し手が「自分が相手よりも上位にある」ことを聞き手に示す(一方的に宣言する)ものと考えられ、「示威」とでもいうべきものである。先述のとおり「行動制御」は上位者が下位者に対して行なうものであり、そのため、話し手が聞き手よりも上位にない場合(話し手が聞き手よりも下位にある場合、両者が同位にある場合、両者の上下関係が不明である場合をまとめていう。以下同様)に「行動制御」を行なうには、話し手が「自分が相手よりも上位にある」ことを聞き手に示す必要があるのである。つまり、話し手が聞き手よりも上位にある場合の「行動制御」において認められる機能が「叱責」であり、話し手が聞き手よりも上位にない場合の「行動制御」において認められる機能が「示威」である。

最後に、(4a・b)の「これ」についてであるが、これらは、(3a)の「こら」と同様に「行動制御+叱責」を行なっているものと考えてよいであろう。なお、現代語における感動詞「これ」は、「行動制御+叱責」機能のもとでの使用が一般的であり、「行動制御+示威」機能のもとでの使用は、ほとんどみられない。

以上より、感動詞「こら」「これ」の機能は、次のように整理できる。

感動詞「おら」の機能について

一三六

- ・行動制御 + 叱責 (話し手が聞き手よりも上位にある場合)
- ・行動制御 + 示威 (話し手が聞き手よりも上位にない場合)

このように、感動詞「こら」「これ」は「行動制御」機能を基本とするものであり、ここから、本稿では、(3 a・b) (4 a・b) の「こら」「これ」のような文を、「言語場構成」機能を基本とする「呼掛」の文や「タイミング調整」機能を基本とする「掛声」の文と区別して、「行動制御」の文と呼びたい¹³⁾。

六 感動詞「おら」の機能

六一一 「呼掛」としての機能

六一一— 「言語場構成+指示」機能

感動詞「おら」は、次のように使用できる。

- (5) a (不良少女が、拾ったアクセサリーを持ち主に手渡す際に) おら (11 a)
- b (相手に差し入れを手渡す際に) おらおら、差し入れだ。

右の「おら」は、次に示すように、第二種呼掛詞「そら」「ほら」に言い換えることができる——「そら」「ほら」への言い換えについて、以下、「そら」と「ほら」とでその自然さに若干の差異が感じられる場合があるかもしれないが、いずれも容認不可能なものではないと思われるため、「言い換えることができる」ものとして一括する——。

- (6) a (不良少女が、拾ったアクセサリーを持ち主に手渡す際に) そら／ほら (11 5 aを改変)
- b (相手に差し入れを手渡す際に) そらそら／ほらほら、差し入れだ。(11 5 bを改変)

そして、(5 a・b) の「おら」と(6 a・b) の「そら／ほら」とは、相手に何か(アクセサリー／差し入れ)を手渡す

際の発話であり、「自分の領域を離れて相手の領域に渡るはずのものとして」その『アクセサリー／差し入れ』が存在する」という事態を「指示」しているものと考えられる。ゆえに、(5 a・b)の「おら」には、「言語場構成＋指示」機能を認めてよいであろう⁽¹⁴⁾。なお、この場合の「おら」は、「そら／ほら」よりも粗暴な発話となる。

六―二 「言語場構成＋気付け・思い出させ」機能

感動詞「おら」は、次のように使用できる。

(7) a (万引きの証拠映像を確認させる場面) おら この万引きしてるのお前だろ? (|| 1 b)

b (意中の相手と車でドライブをしている際に突然巨大仏が見えた、という場面) まるで、「おらおら見てるぞ見てるぞ、仏さまが見てるんだぞ、変なことするんじゃないぞ」とでも言うようなその巨大仏のせいで、私はあらためてムード構築をゼロからやりなおすはめになったのである。(「晴」)

右の「おら」は、次に示すように、第二種呼掛詞「そら」「ほら」に言い換えることができる。

(8) a (万引きの証拠映像を確認させる場面) そら／ほら この万引きしてるのお前だろ? (|| 7 aを改変)

b (意中の相手と車でドライブをしている際に突然巨大仏が見えた、という場面) まるで、「そらそら／ほらほら」見てるぞ見てるぞ、仏さまが見てるんだぞ、変なことするんじゃないぞ」とでも言うようなその巨大仏のせいで、私はあらためてムード構築をゼロからやりなおすはめになったのである。(|| 7 bを改変)

そして、(7 a・b)の「おら」と(8 a・b)の「そら／ほら」とは、話し手にとっては既に登録済みの情報(聞き手が万引きをした／仏さまが見ている)を聞き手に気づかせたり思い出させたりする発話であると考えられる。ゆえに、(7 a・b)の「おら」には、「言語場構成＋気付け・思い出させ」機能を認めてよいであろう。なお、この場合の

「おら」もまた、「そら／ほら」よりも粗暴な発話となる。

六―一―三 「言語場構成+促し」機能

感動詞「おら」は、次のように使用できる。

(9) a (雨を降らせるとけてなくなる雲に対して) おら、とける。そら、とける。〔…略…〕(≡1c)

b (酒を飲んでいる女性の発話) にやははっ！ まだまだこんなもんじゃないさね。オラオラどんどんおかわりもつてこーい！ あとイイ男もつてこーい！ 酌しろ酌う！ 酒がたんねーぞお！〔落〕(二三)

右の「おら」は、次に示すように、第二種呼掛詞「そら」「ほら」に言い換えることができる。

(10) a (雨を降らせるとけてなくなる雲に対して) そら／ほら、とける。そら、とける。〔…略…〕(≡9aを改変)

b (酒を飲んでいる女性の発話) にやははっ！ まだまだこんなもんじゃないさね。ソラソラ／ホラホラどんどんおかわりもつてこーい！ あとイイ男もつてこーい！ 酌しろ酌う！ 酒がたんねーぞお！(≡9

bを改変)

そして、(9 a・b)の「おら」と(10 a・b)の「そら／ほら」とは、相手に何らかの行為(とける／おかわりをもってくる)を促す発話であると考えられる。ゆえに、(9 a・b)の「おら」には、「言語場構成+促し」機能を認めてよいであろう。なお、この場合の「おら」も、前項・前々項同様に、「そら／ほら」よりも粗暴な発話となる。

六―二 「掛声」としての「タイミング調整」機能

感動詞「おら」は、次のように使用できる。

(11) a (戦いの場面で、屈んだ体勢をとった話し手が、立っている相手の足を掴もうとする際に) ホッ ホイ ヨッ オ
ラ| ホ (|| 1 d)
b (カップ酒の容器で風鈴を作る場面) ウルウルとなった〔引用者註…地味な作業に数時間を費やしていることに悲しくなった〕俺は小さな凹みに太い釘を押し当て、金槌でオラオラ！ オラオラ！ と叩きまくった。〔P6〕

右の「おら」は、次に示すように、掛声として使用される「そら」「ほら」に言い換えることができる。

(12) a (戦いの場面で、屈んだ体勢をとった話し手が、立っている相手の足を掴もうとする際に) ホッ ホイ ヨッ [ソ
ラ| ホラ] ホ (|| 11 a を改変)

b (カップ酒の容器で風鈴を作る場面) ウルウルとなった〔引用者註…地味な作業に数時間を費やしていることに悲しくなった〕俺は小さな凹みに太い釘を押し当て、金槌で [ソラソラ！ ソラソラ！/ホラホラ！
ホラホラ！] と叩きまくった。(|| 11 b を改変)

そして、(11 a・b)の「おら」と(12 a・b)の「そら／ほら」とは、話し手自身一人のみが行なう動作(相手の足を掴む／金槌で釘を打つ)のタイミニングを調整するための発話であると考えられる。ゆえに、(11 a・b)の「おら」には、「タイミニング調整」機能を認めてよいであろう¹⁰⁾。なお、この場合の「おら」には、先の「言語場構成＋指示」機能・「言語場構成＋気付けせ・思い出させ」機能・「言語場構成＋促し」機能の場合とは異なり、粗暴さが「そら／ほら」と同程度にしか感じられない。そしてこれは、呼掛が話し手・聞き手間の待遇と密接に関わるのに対して、掛声はそのような待遇との関わりが希薄であることによるものと考えられる¹⁰⁾。

六―三 「行動制御」としての「行動制御＋威嚇」機能

感動詞「おら」は、次のように使用できる。

(13) a (男子高校生が、横並びで歩いている他校の男女に対して) オラ てめえらなにイチャこいてんだ しばかれて

えのか? (|| 1 e)

b (隊長が隊員たちに対して) オラオラ! グズグズするな! 階段で地下一階まで降りるぞ! 行け行け行

け!! (|| t)

右の「おら」を、行動制御として使用される「こら」に言い換えると、次のようになる。

(14) a (男子高校生が、横並びで歩いている他校の男女に対して) コラ てめえらなにイチャこいてんだ しばかれて

えのか? (|| 13 aを改変)

b (隊長が隊員たちに対して) コラコラ! グズグズするな! 階段で地下一階まで降りるぞ! 行け行け行

け!! (|| 13 bを改変)

(13 a) (14 a) においては話し手が聞き手よりも上位になく、(13 b) (14 b) においては話し手が聞き手よりも上位にある。これまでと同様に(13 a・b)の「おら」が「こら」にそのまま対応するものであるならば、(13 a)の「おら」および(14 a)の「こら」には「行動制御＋示威」機能が認められ、(13 b)の「おら」および(14 b)の「こら」には「行動制御＋叱責」機能が認められることになろう。しかしながら、(13 b)の「おら」は、「叱責」というよりも遥かに強い語感を伴っており、(13 a)の「おら」と同様に「示威」を行なっているように思われる。否、むしろ、(13 a・b)の「おら」は、「示威」――威力を相手に示す――を超えて「威嚇」――威力を相手に示して嚇す――を行なっているというべきであろう(事実、第二節に引用したように、『大辞林』(第四版)の「おらおら」の項には「乱暴に呼び

掛けたり、威嚇するようなどに発する語」と記述されている。そして、その結果として、話し手が聞き手よりも上位にある(13 b)にあつては、「おら」に続く命令表現に強い強制力が感じられる。つまり、「おら」は、「こら」とは異なり、話し手が聞き手よりも上位にある場合にも、話し手が聞き手に対して「自分が相手よりも上位にある」こととさら示すのであり、また「粗暴さを伴う」という性質と相俟つて、その威力を以て相手を嚇し、従わせる発話となるのである。

以上より、(13 a・b)の「おら」は、話し手が「自分が相手よりも上位にある」ことを聞き手に示して嚇し、聞き手の行動を制御する(イチャコクことをやめさせる／グズグズさせずに行かせる)発話であると考えられ、「行動制御+威嚇」機能が認められる¹⁷⁾。なお、この場合の「おら」は、「こら」よりも粗暴な発話となる。そしてこれは、行動制御が、呼掛と同じく、話し手・聞き手間の待遇(上下関係)と密接に関わるためであると考えられる。

七 ま と め

感動詞「おら」は、「呼掛」「掛声」「行動制御」という三種の文に跨つて使用され、合計五つの機能をもつ。五つの機能を本稿で取りあげた順に【機能一】～【機能五】とすると、感動詞「おら」の機能は、次のように整理される。

- ・「呼掛」としての機能 …… 【機能一】「言語場構成+指示」機能
- ・「掛声」としての機能 …… 【機能二】「言語場構成+気付けせ・思い出させ」機能
- ・「行動制御」としての機能 …… 【機能三】「言語場構成+促し」機能
- ・「掛声」としての機能 …… 【機能四】「タイミング調整」機能
- ・「行動制御」としての機能 …… 【機能五】「行動制御+威嚇」機能

感動詞「おら」の機能について

さらに、「呼掛」「掛声」「行動制御」には、「聞き手」を必要とする、という共通点がある。

なお、第二節にその記述を引用した『三省堂国語辞典』（第七版）・『大辞林』（第四版）・『デジタル大辞泉』・『日本俗語大辞典』（初版）は、その語釈および用例からみて、五つの機能のうち【機能三】または【機能五】について述べたものと思われる。また、『日本俗語大辞典』（初版）の「おら」の項には「男性が使用」と記述されているが、実際には女性による使用例——本稿に挙げたものでいえば、(1 a || 5 a) (9 b)——も観察されるため、より正確な記述を目指すならば「その使用者として男性が想定されやすい」などとすべきである¹⁸⁾。

感動詞は、対象的意味を積極的に欠如した態勢においてもつために、個々の場面の中に置かれてはじめて機能し、意味をもつ。ここから、感動詞は、一つの語が様々な機能や意味を有することになる。「おら」が五つの機能をもつのは、特別なことではなく、「一つの語が様々な機能や意味を有する」という感動詞一般の性質に帰して考えられることである。

以上、本稿では、感動詞「おら」の機能について論じた。感動詞「おら」の研究として充分なものではない¹⁹⁾が、文法論の観点からその機能を明らかにするという目的は果たし得たものと考え、ひとまず筆を擱く。

註(1) 拙稿(二〇一六)は、「感動詞」を、「それ自体が独立して一つの完全な文となり得る」「対象的意味を積極的に欠如した

態勢においても作用的意味に卓越している」という二つの文法的特徴をともに満たすものとして規定する。本稿は、これを踏襲するものである。なお、拙稿(二〇一六)は「感動詞・呼掛詞・応答詞などを総合する概念としての「感動詞」について言及する際にはこれを「広義感動詞」と呼び、広義感動詞の下位類としての「感動詞」について言及する際にはこれを「狭義感動詞」と呼ぶ」が、本稿にいう「感動詞」は、すべて「広義感動詞」を指すものである。

(2) 用例の出典は、稿末の略記に従って示す。なお、出典を記載していない用例は、作例である。

- (3) 少なくとも、次に示す国語辞典は、感動詞「おら」（および「おらおら」）を立項していない。
- 『岩波国語辞典』（第八版）／『旺文社国語辞典』（第一二版）／『学研現代新国語辞典』（改訂第六版）／『角川必携国語辞典』（初版）／『現代国語例解辞典』（第五版）／『広辞苑』（第七版）／『講談社国語辞典』（第三版）／『三省堂現代新国語辞典』（第六版）／『集英社国語辞典』（第三版）／『小学館日本語新辞典』（初版）／『新解国語辞典』（第二版）／『新選国語辞典』（第九版）／『新潮現代国語辞典』（第二版）／『新明解国語辞典』（第七版）／『大辞泉』（第二版）／『日本国語大辞典』（第二版）／『明鏡国語辞典』（第二版）
- (4) 以下、本稿において辞典類の記述を引用する際、一部の記号類については、これを、類似する別の記号類に置き換えた場合がある。
- (5) 『日本俗語大辞典』（初版）には、「おらおらおら」を見出し語とする項もある。参考までに、その記述を次に引用しておく。
- ・ おらおらおら「感」相手に迫るように物を見せ、注意を促したり嫌がらせをしたりする時に発することば。谷岡ヤスジの漫画から出たことば。◇『平凡パンチ』（1973年4月9日号）「二連の谷岡ヤスジ漫画は、ナンセンス流行語を大氾濫させた。〈オラオラオラ〉、〈鼻血ブー〉、〈だもんネ〉など、折からのポルノブームに乗じて、たちまち幼児にまで感染」◇『東京困惑日記』ピロウな話（1991年）〈原田宗男〉「うりゃあ！ クソだクソだ。おらおらおら！」
- (6) 拙稿（二〇一六）は、森重（一九五九）に倣って、呼掛に使用される感動詞を「呼掛詞」と呼ぶ。本稿は、これを踏襲する。
- (7) 〈我〉〈汝〉は、ともに拙稿（二〇一五）による用語であり、呼掛において、広く「話し手」と呼ばれてきたものを、言語場におけるもの（Ⅱ〈我〉）と言語場構成以前におけるもの（Ⅱ〈呼掛主体〉）とにわけ、同様に、広く「聞き手」と呼ばれてきたものを、言語場におけるもの（Ⅱ〈汝〉）と言語場構成以前におけるもの（Ⅱ〈呼掛対象〉）とにわけ。
- (8) ここに示す呼掛詞は、その変異形と考えられるものも含む。すなわち、ここでの「おい」や「ほら」は「おいおい」「おおい」や「ほらほら」などをも含んでいる、ということである。
- (9) この整理は、拙稿（二〇一六）における整理の一部を抜き出したものである。

感動詞「おら」の機能について

一四四

- (10) (2 a ~ e) は、拙稿(二〇一七)が挙げたものであり、すべて作例である。
掛声には、次のように、話し手の人数が複数である用例も存在する。

・「どっこいしょっ、と」二人の駕籠屋、声をそろえて肩を入れた。(『つ』)

・(大勢で神輿を担ぐ際に) よいさ! どっこいさ!! わっしょい わっしょい(『こ』六五)

拙稿(二〇一七)は、かかる例について、次のように述べる(引用文中の「⑥」「⑦」は、それぞれ、右の「つ」「こ」五の例を指すものである)。

本稿では、⑥⑦を、個々の話し手がそれぞれに、話し手自身と話し手自身以外の者との両方を聞き手とする(＝A類の)発話を行なった結果成立したものと解釈して、A類の例と考える。そして、話し手が複数人である掛声には、⑥⑦のように話し手全員を聞き手とするもの他、話し手のうちの一部のみを聞き手とするもの、話し手全員と話し手以外の者との両方を聞き手とするもの、話し手のうちの一部のみと話し手以外の者との両方を聞き手とするもの、話し手以外の者のみを聞き手とするもの、の四つが論理的にあり得るが、後三者は、⑥⑦と同様に、個々の話し手がそれぞれにA類の発話を行なった結果の例と解釈でき、残る、話し手のうちの一部のみを聞き手とするものも、その話し手の中にA類の発話を行なう者が必ず存在し、「話し手自身のみを聞き手とする」(＝B類の)例とはいいい難いことから、A類と考えてよいであろう。要するに、話し手が複数人である用例は、すべてA類と考えられるのである。

そのうえで、(2 a ~ e) のような話し手が一人である例の解釈と合わせて、「話し手自身一人のみを(話し手が一人であり、その話し手自身のみを)聞き手とするのがB類であり、そのほかはA類である」とする。

- (12) 『現代感動詞用法辞典』(初版)は「話し手の音域における高音(H)・中音(M)・低音(L)という相対音高を表す」として、個々の感動詞の「音調」を記述するものであり、引用中の「HM」とは、「こ」が「H(高音)」、「ら」が「M(中音)」という音調であることを表す。なお、当該辞典は、感動詞「おら」(および「おらおら」)については、立項していない。

- (13) 以上、「行動制御」に使用される感動詞として「こら」「これ」を挙げたが、「こらこら」「これこれ」といった変異形についても、それぞれ「こら」「これ」と同様に考えてよいと思われる。それゆえ、以下本稿において「こら」「これ」というとき、それは、その変異形をも含むものとする。

(14) 拙稿(二〇一六)は、「ソ」系指示詞と関係する「呼掛詞「そら」「それ」「ほら」「ほれ」には「指示」機能を認める一方で「ソ」系指示詞との関係をもたない呼掛詞「はい」「へい」「ほい」の機能については、「指示」に準じるものとす¹⁾る。感動詞「おら」と「ソ」系指示詞との関係の有無は、現時点では不明である。そのため、「おら」に「指示」に準じるものとしてではなく、「指示」機能そのものを認めることは、厳密に考えれば、適切ではないであろう。しかしながら、「おら」が、「そら」「それ」「ほら」「ほれ」と「はい」「へい」「ほい」とのいずれに近いかを考えると、その語形から前者に近いといえよう。ここから、本稿では、ひとまず、「おら」に「言語場構成+指示」機能を認めておきたい。また、後述する諸機能の認定についても、同様に考える。

(15) (11 a・b)の「おら」はB類の掛声であるが、掛声には、B類の他にA I類・A II類がある。「おら」は、「動作の内容の表示」を行ない得ないためA II類として使用されず、あるとすればA I類としての使用であるが、拙稿(二〇一七)がA I類の例として挙げる用例

・(穴の中に落ちた車を数人で押し上げる際に) さあ、こっちから押すんだぞ。一チ、二イ、三ソ。そら、よいしょ
(「探」)

の「そら」を「おら」に改変した用例

・(穴の中に落ちた車を数人で押し上げる際に) さあ、こっちから押すんだぞ。一チ、二イ、三ソ。おら、よいしょ
(「右例を改変」)

が可能な発話であることから、「おら」のA I類としての使用も認められる。

(16) 拙稿(二〇一五)は、名詞による呼掛について、「先生」「陛下」といった「敬称」が「呼掛対象」を「呼掛主体」からみた待遇の関係によって規定するものであることや、「御」「君」「上」「ども」「たち」「ら」「が」という接辞が「待遇の関係規定の〈個性〉化形式」として呼掛と関わることを述べる。また、拙稿(二〇一六)は、呼掛詞による呼掛について、原理的にみて、上下・親疎・公私といった話し手・聞き手間の待遇の分化や年齢・性別といった「人」がもつ属性の分化から個々の呼掛詞がもつ独自の用法が生じることを述べる。一方で、掛声は、基本的に「タイミング調整」ができればそれでよく、話し手・聞き手間の待遇はそれほど重要ではない。

(17) したがって、「行動制御」としての感動詞「おら」「こら」「これ」について、「こら」「これ」には「行動制御+叱責」機

感動詞「おら」の機能について

能および「行動制御＋示威」機能が認められ、「おら」には「行動制御＋威嚇」機能が認められることとなる。

- (18) 感動詞「おら」を用いた発話は、「人」が「人」に対して行なうものであるが、「人」と「人」とが話し手・聞き手として対峙するとき——すなわち、言語場が成立するとき——、そこには、上下・親疎・公私といった待遇の分化や、「人」がもつ年齢・性別といった属性の分化が発生する。「おら」の「使用者として男性が想定されやすい」のは、原理的に、かかる属性の分化に由来するものである（なお、個々の呼掛詞および応答詞がもつ、上下や性別などに関する独自の用法についても、かかる待遇・属性の分化から生じるものとして同様に説明できる。これについては、拙稿（二〇一六）および拙稿（二〇一八）を参照）。

- (19) 感動詞「おら」の成立については、その語形および機能を近しくする「こら」「そら」「ほら」との関連も考えられるが、文献の調査が進んでいない現時点では、不明とせざるを得ない。今後、必要な調査を行なったうえで分析を進める必要がある。また、感動詞「こら」「そら」「ほら」にはそれぞれに語形・機能の両面で対応する感動詞「これ」「それ」「ほれ」が存在する一方で、感動詞「おら」については、対応者として予測される感動詞「おれ」が（少なくとも現代共通日本語においては）存在しない、という事実があり、これについても今後検討する必要がある。

参考文献

- 田窪行則・金水敏（一九九七）「応答詞・感動詞の談話的機能」（音声文法研究会（編）『文法と音声』くろしお出版）
- 森重敏（一九五九）『日本文法通論』風間書房
- 六城雅章（二〇一五）「名詞による呼掛について——喚体論の視点から——」『日本文藝研究』六七―一・関西学院大学日本文学会
- 六城雅章（二〇一六）「呼掛詞による呼掛について」『日本文藝研究』六七―二／六八―一・関西学院大学日本文学会
- 六城雅章（二〇一七）「掛声について」『日本文藝研究』六九―一・関西学院大学日本文学会
- 六城雅章（二〇一八）「応答詞による応答について——呼掛に対する応答の場合——」『日本文藝研究』七〇―一・関西学院大学日本文学会
- 『岩波国語辞典』（第八版）……西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫・柏野和佳子・星野和子・丸山直子（編）／二〇一九年／岩波書

店

- 『旺文社国語辞典』(第一版)……山口明穂・和田利政・池田和臣(編)／二〇一三年／旺文社
- 『学研現代新国語辞典』(改訂第六版)……金田一春彦・金田一秀穂(編)／二〇一七年／学研プラス
- 『角川必携国語辞典』(初版)……大野晋・田中章夫(編)／一九九五年／角川書店
- 『現代感動詞用法辞典』(初版)……浅田秀子／二〇一七年／東京堂出版
- 『現代国語例解辞典』(第五版)……林巨樹・松井栄一(監修)、小学館辞典編集部(編)／二〇一六年／小学館
- 『広辞苑』(第七版)……新村出(編)／二〇一八年／岩波書店
- 『講談社国語辞典』(第三版)……阪倉篤義・林大(監修)／二〇〇四年／講談社
- 『三省堂現代新国語辞典』(第六版)……小野正弘(主幹)、市川孝・見坊豪紀・飯間浩明・中里理子・鳴海伸一・関口祐未(編)／二〇一九年／三省堂
- 『三省堂国語辞典』(第七版)……見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大(編)／二〇一四年／三省堂
- 『集英社国語辞典』(第三版)……森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一(編)／二〇一二年／集英社
- 『小学館日本語新辞典』(初版)……松井栄一(編)／二〇〇五年／小学館
- 『新解国語辞典』(第二版)……大石初太郎(編)／一九九九年／小学館
- 『新選国語辞典』(第九版)……金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎・野村雅昭(編)／二〇一一年／小学館
- 『新潮現代国語辞典』(第二版)……山田俊雄・築島裕・白藤禮幸・奥田勲(編)／二〇〇〇年／新潮社
- 『新明解国語辞典』(第七版)……山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之(編)／二〇一二年／三省堂
- 『大辞泉』(第二版)……松村明(監修)、小学館大辞泉編集部(編)／二〇一二年／小学館
- 『大辞林』(第四版)……松村明・三省堂編修所(編)／二〇一九年／三省堂
- 『デジタル大辞泉』……松村明(監修)、池上秋彦・金田弘・杉崎一雄・鈴木丹士郎・中嶋尚・林巨樹・飛田良文(編集委員)、田中牧郎・曾根脩(編集協力)／二〇一九年五月一日更新／小学館
- 『日本国語大辞典』(第二版)……日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部(編)／二〇〇〇—二〇〇二年／小学館

感動詞「おら」の機能について

学館

『日本俗語大辞典』（初版）……米川明彦（編）／二〇〇三年／東京堂出版
『明鏡国語辞典』（第二版）……北原保雄（編）／二〇一〇年／大修館書店

用例出典

『ヤ』||忍『ヤンデレ彼女』五／『い』||中村なん『いじめるヤバイ奴』三・五／『雲』||渡辺わらん（作）・藤田裕美（絵）『雲の飼
い方』／『ホ』||森恒二『ホーリーランド』九／『つ』||林不忘『つづれ烏羽玉』／『こ』||秋本治『こちら葛飾区亀有公園前派出所』
六五／『ク』||白井儀人『クレヨンしんちゃん』一／『カ』||加瀬あつし『カメレオン』一〇／『白』||伊藤野枝『白痴の母』／『三』
||吉川英治『三国志』／『晴』||宮田珠己『晴れた日は巨大仏を見に』／『落』||海空りく『落第騎士の英雄譚』一三／『バ』||火星紳
士・上野家はん駄・ちとく『火星パンダちとく文学』／『探』||海野十三『火星探検』／『t』||沼狸庵翁嫡齋『the grnd』

（ろくじょう つねあき・関西学院大学院文学研究科研究員）